

斜め時代考

小原 克博

4



こはら・かつひろ氏 1965年大阪生まれ。同志社大学大学院神学研究科博士課程修了。博士(神学)。専門はキリスト教思想、宗教倫理学。生命倫理、エコロジーなど多様な学問領域を切り口に、現代社会が直面する課題に取り組み。

「孤独」と聞いて、好ましいと感じる人は少ない。孤独な体験は人をしばしば絶望的な気持ちへと追いやるからだ。ただし、一口に孤独と言っても、その経験は人によって千差万別だ。愛する人、親しくしてきた人との死別。自分自身が病気になる、これまでと同じ生活をできなくなってしまうときに感じる孤独。この孤独は、かつての健康な自分との別れを伴っている。

好んで孤独を味わいたい人はいないだろう。そう、孤独は選んでなるものではない。人はただ一人でいることの快楽を選ぶことはできても、根源的な孤独の縁に立たされることを選ぶことはできない。むしろ、孤独は、本人の願いに反し、突如として到来するからこそ、人の人生に激震をもたらすのである。

かつて、そうした孤独のマグニチュードを人間形成に活用していた時代もあった。社会の近代化と共に、今ではすっかり失われつつ

あるが、伝統的なイニシエーション(通過儀礼)の中では、孤独に耐えることは、子どもから大人への重要な分節点の一つであった。イニシエーションという言葉は、オウム真理教事件との関係で、不幸にも否定的な印象を与えられてきたが、元来、それは多くの社会において、一人前の大人になるための仕組みを用意してくれていた。イニシエーションには無数の種類があるが、その意味を突き詰めていくなら「死と再生」の秘儀に行き着くことになる。過去にわたしが「死」することによって、新たなわたしが「再生」されるという秘儀である。

現代社会が死を厭うように、孤独は厭わしいものとされ、その対極にある価値「つながっている」ことが、インターネットに代表される現代的価値の主流を独占している。ケータイ世代にとって、ケータイはつながりを保証してくれる強力なツールに他ならない。だから、ケータイにメールが一通も来ない、返信が来ないとなれば、それは大いなる孤独の予兆となるのである。ケータイが身体の一部になった今、

繁華街の一角で(京都市中京区)。孤独を選ぶことで自由が与えられるのか…



欲求を多分に反映している。

こうして現代人は、テクノロジに多く依存している。安定した支えを持ちたいという欲求が新たなテクノロジを生み出し、そして生み出されたテクノロジは、また新たな欲求に拍車をかけることになる。このような人間の欲求とテクノロジの間に生じる、らせんの上昇運動の行き着く先をわれわれは知らない。この渦は強力な吸引力を持つている。その渦の流れに身をゆだねることも一計である。

しかし、そこからの自由を求めるなら、孤独は力強い友となってくれる。皮肉な言い方になるが、孤独こそが人間に真の自由を与える、いしずえなのだ。

「ケータイなしに生きよ」と命じられたとき、孤独の葛藤を感じない人はどれくらいいるだろうか。ケータイは、それほど現代人の孤独をせき止める重要な安全弁となり、支えとなっているのだ。

ケータイに限らない。愛する人、健康な身体、信頼に足る組織。そういった支えがいきなりはずされたとき、孤独はやってくる。だからこそ、人は安定した組織に身を寄せたいと願い、「死」を回避して健康を「再生」してくれる医療技術を求めるのである。二十一世紀が生命科学の時代と言われるのは、そうした人間の

テクノ社会の孤独

求めるのは、そうした人間の

むしろ孤独によって選ばれている。支えがはずされたときに、たえずいる孤高のあなたには、再生への恩寵が注がれているのかもしれない。

(同志社大教授)

ケータイが現代人の支えに